

地域づくりにおける生活圏と意識について

表記題目の問題について雑感を綴りました。

1. はじめに

(1)目的： 本稿では、居住者の視点で地域づくりは如何にあるべきかを考えるために、日常生活の生活圏をもとにした人の行動と意識に着目し検討することにした。具体的には、これまで調査しかかわってきた取り組み事例における生活圏の様相や意識のデータをもとに地域と人の一体化と意識について整理・考察する。ただし、本稿では村(イコール集落)に対して街という言葉を使っているが、街と村の構図はマクロ的には都市と田舎であったりもする。また、地域を街と村とすることもある。用語はかなり状況に応じて使用する。

(2)問題の所在：

- ・これまでの街づくりや村づくりといえ、街では商業の賑わいが、また村では村の資源による観光や特産品販売が主に取り組みられて、時には賑わいや風情がウリとなっている。しかしながら、それだけでいいのであろうか。いつも思うには、生業と居住は一体であるという視点、すなわち居住者の視点が今一つ欠けているように見える。そこであらたな方策をと考えたのが、観光や賑わいの前に居住者の生活を充実させる街づくりであり村づくりである。これには、やはり居住者の意識をもとに、地域づくりのポイントである人間関係づくりにも言及でき、しかもその上に種々の方策を上乗せしていくこともできよう。

- ・住まいづくりの一環に住宅政策のアプローチがある。これには都市計画の論理が上から降ってくるかのようであり、もともと当該地にいる居住者の視点が入りにくいばかりか、その後の展開も定められたガイドラインに従わざるを得ないようにも見え、生活の営みからの生活充実とは路線が異なっている。別途機会があればとしてここでは扱わない。

- ・なぜ意識を問題にしたのかの理由について、住民の意識改革が必要とか言われることが多いが、そうではなく生活圏に意識がどう根付いてきたのか、そこからどう意識を展開していくべきかが問われているからである。また、土地と人間が一体となっていることこそ居住そのものであり、意識化はそこから始まると考えている。

2. 地域の現状、街や村の現状、都会や田舎の現状

(1)社会の様相： 社会全体では周知のように格差社会、少子高齢化、都市人口集中、経済至上主義、効率化、人間関係の希薄化、孤立生活、(何事にも)かかわりを避ける生活、等があげられる。また、都会ではヒステリックかつ無力感が漂い、田舎では都会に右ならいの傾向が強まっている。

(2)都会と田舎の構成： 生活のレベルで項目を挙げる。

- ・田舎ではもとより都会へ目が向きがち。物事の多くは都会から入ってくる。
- ・余裕のなさ：多くの共稼ぎ家庭では余裕時間が少ない。折角の土日は自分の時間とする。
- ・便利さ：買物には一週に一回のまとめ買い。安さと品数の多さを求めて車利用で都市部に。

(3)市域の最近の様相： 市域では、選択集中に基づくコンパクト化があちこちで着手されようとしている。これまでのコンパクト化で名を挙げた市域をみていると、コンパクト化による重要域だけの改善(市域再生)が目立っており、コンパクト化から外れた区域では人口減少・生活基盤崩壊により廃れが進行し始まろうとしている。

(4)田舎の最近の様相： 都市への労働力提供として田舎から若者が流出し、人口減少が止まらず、田舎では居住者の高齢化が進み根本的な危機を迎えていることは周知の事実である。

・生業や観光資源による業があれば、当該地が如何に人口減であっても観光客を介して都会とつながっているとして地域の存在理由を見出すこともある。これは田舎と都会との連携として、当該地生活圏が都会とのネットワーク的存在にあることを意味している。

(5)ヒューマンウェアの視点で： 地域づくりについては、居住の安定と生業の安定が求められている。これを実現するためには、賑わいが必要という考えとあくまでも居住の充実という考えとがある。一方、居住の観点から他地域からの移住定住や当該地域での若者定住の取り組みもある。実際には、両者あわせた形で人を呼び寄せ、産業を起し、賑わいが図られている。

3 生活圏について

3.1 着目： 各地域で人間味あふれるコミュニティが形成されるとして多数の報告事例では、街・村があたかも見渡せるようなイメージの広がりがあり、地域における人的距離が短いことを伺い知ることができる。こうした様相で広がる地域は地域住民の生活圏そのものである。ならば生活圏における営みや街づくりに加えて意識についてもっと理屈を付与したい。

3.2 生活圏のイメージ： 地域づくりはコミュニティ形成そのもの。そこには、生業あり、人々の顔が見え、気配が感じられる。すなわち人間味のある環境ということであり、人と自然の調和が図られている。ではそれにはどうするのか。過密や膨大さを避けることで、程よい広さと濃さ(人口密度)が必要として、これらを生活圏の具備する条件としたい。

しかし、生活圏といっても人の行動は目的によって範囲が様々であり、行動によって仕事圏、通学圏、買い物圏といったように圏がそれぞれ設定されよう。ここでは、日常圏として小学校区の範囲の圏を基準にして、きめ細かな地域活動としてはさらに小さな町内会圏として生活圏を設定し、以後単に圏と呼ぶことにする。

また、設定した圏の外と内については、例えば買い物は時折圏外といったこともあり、これを圏内外の出入りとかアクセスということにする。

3.3 村や町の生活圏： 圏は地域として街と村の区別なく設定となっている。とはいえ、街には社会資本の充実があり、村には自然が豊富にあることから、互いの圏を超えての交流があるので、両者を含めて大きな圏を階層構造としても設定できる。そんな階層圏では、圏の出入りやアクセスが頻繁になっていることで問題も浮上している。以下に記す。

- ・人的交流、今は圏の結びつきが風化気味。学校単位の圏。
- ・グローバル化→過疎地では学校拠点方式が廃止の方向。

3.4 圏と意識： 人は土地に根差して成長し、生活し、意識が育まれている。そんな人と土地とのやり取りの集積が土地と人とのアイデンティティとなっているものであり、地域意識といってもいいであろう。そして、人は地域民となって地域意識とかかわり、地域での営みの集積を歴史として背負っていくことになる。ここで、そうした様相を私はさりげなく圏や街の匂いと言いたい。これは人の生活感が圏や街に滲み出てくるといったイメージのものである。

3.5 圏が特にスパースな場合 未満集落： 圏が存在するのかという特殊なケースもある。限界集落にもなっていない場合にはどうなるのか。集落は必ずしも集まることを前提とせずに、限界を通り越して衰退したとしても居住地には変わりはない。しかも、最近自然農業をする方々が単独で山の中や人里離れて孤立住まいもある。よって、これらを未満集落と呼ぶことにする。

未満集落では、集落形態をとらず散在点在の孤立居住でも、当該集落を含む地域全体でつながる形態もある。そこでは、これまでのような集落内のつながりではなく、直接外部との時折のつながりがあればそれで十分ともいえる。また、インフラについてはライン(ライフライン)でなくパーソナルにすべきであろう。特に下水にはパーソナル化技術の開発を期待したい。

4. 地域づくりに向けて

4.1 圏の機能： 地域づくりとは、圏の整備とともに居住を充実させることである。圏における生活意識の充実には、人づくり、教育、居住の充実、魅力づくり等があり、それを可能にする人の多様性と圏内外の人の交流である。

4.2 人と意識、多様な人間模様

圏における人間の多様さは日常的には目立たないが、地域づくりの際に顕著になる。

(1)突出する人間： 街の活性化にはよく言われている「若者、ばか者、よそ者」が立役者である。もちろんそこには地元の人も入っている。圏を出入りする今の状況を見てみよう。

・よそ者の価値：地元の方に比してよそ者の方が良く見えていのは、よそからくるのでそれだけパワフルであることと地元民が事物に見慣れ不感症になっていることの現れである。

・地元の価値：日頃、地元だから見えない、大切にしないこともあり。とはいえ何といっても地域を変えていくのは地元民である。地元がよそ者のエスコトを受けて動くのではなく、お互い尊重しあってあくまでも一緒に動き、地域の良さを互いに協力して見つけ、そして使えるようにアイデアを練り上げていく。これにより、各種取り組みに幅ができ妙案が生まれる。

・トラブル：よそ者でも地元に住まないうえに非常に熱い人が良かれと思って地元民に押し付けもあり、決まってトラブルが生じる。

・ばか者、若者：見返り関係無しに思いを持って進むのがばか者である。エネルギーに進めるのはやはり若者である。特別ばかでなくても若者は次世代背負い活気づける。

・多くの地元民の意識：彼らがやってくれるなら、やってもらおうという意識がほとんどである。このため、推進側としては何とか地元民に行動しましょうと働きかけている。

(2)自分中心の意識： ビジネス化と押し付けの二点あげたい。

・とにかく活性化を目指して、金を落とすシステムを考えるとといったビジネスライクの考えが若者の一部にはいる。これはもう、ばか者ではなく経済人の様相であり、一見、地元を受け入れられるが如くではあるが、トラブルとなる事が多い。

・地域づくりで住民を巻き込んでということが多い。巻き込むとはどういう意味か。そこには巻き込まれる側の人格はまるでない。そのようなことで地域全体を活性できるのか、考え違いの方々が少なからずいる。

(3)にわか人の参画： 最近、どこの自治体でも街づくりに関心ある若い方を全国から集め、当該地の合宿付きでアイデアを出していただくのである。行政は、彼らのアイデアのいくつかを施策にしようという。地元民には、彼らとの交流や討議もないばかりか、優秀アイデアも地元民が過去に提出すみのものである。地元民よりゲスト学生を優先ということは地元民無視そのものである。

4.3 圏における価値観： 地域づくりでは地元民の積極的参加に向けて価値観の転換や認識の是正が求められている。その一方では、賑わいの無理強いにより地域が振り回されることが多い。価値観を変えるなら、地域での営みが充実するように変えていくものである。無理をして地域が疲弊しては何もならない。

4.4 圏における硬直化： まず田舎の方では、圏の狭さが硬直化として弊害となっていることから述べる。

・プライド喪失：田舎ではどうしても街に対してのコンプレックスがある。これが田舎対街の対等な関係を損ねてしまい、時として都市部に居を移し、就職先を地域ではなく都市部にすることも多い。根底には地域に対し、自分に対し、へりくだりがみられる。

・孤立居住：地域の絆の必要性を感じない若者が増えている。近所付き合いも希薄化。

- ・地域居住：移住者と既住者との間の亀裂やアパート居住者と一般居住者との間の亀裂。
- ・子どもと親：チャレンジ精神が育っていない。子どもの自主性をみとめない。
- ・価値観：自分中心。地域のつながりよりも職場等のつながりが優先。地域活動に参加せず。
- ・自己の意識：周りを気にしすぎ、自分から率先した考えを示さず、皆さんと同じ考えにあわせる。しかも何事にもあきらめるように強いられることもままあり。一般社会では、雲上の世界と下界があるといった構図がすりこまれ気味である。
- ・公共心：公共の概念は近代になってからのものであり、それまではどちらかというコモンズの考えであった。これがマナーの次元になったときに一本芯がなくなった感がある。このためか、現実には公共を下支えすることは低調なようである。

4.5 人格尊重： 硬直化の問題は、多分に、地域への愛着、プライド、人間性のものであり、もともとは圏が狭いことによる圏外との交流の少なさが原因かと思う。圏内での交流の密実さは圏外交流と共にあるべきことはいまでもなく、こうしたことから、まずは人を大事にするあたり前のことがあたりまえに定着するようにしたいものである。

4.6 人づくり： 移住定住の取り組みにおけるキャッチは地域での良質な教育や良質な人間関係を謳っていることが多い。しかし、内情は人を育てようといった姿勢がないことがほとんどである。例えば進学に際し地元の高校ではなく市域の高校へ。少しでも大学受験に有利なように。教育は何たるかを今一度議論し、過度の競争の克服を日常生活の充実に求めたい。

4.7 人的かかわり

(1)ふれあい： 例を紹介する。・佐賀ではフットパスの取り組みが盛んであり、来訪者が当該地域にて決められたパスを歩きながらの探訪であるので、地元民と来訪者のコミュニケーションが自然とわだかまりなく行われている。ルートが決められているので、来訪者と地元民とも互いに安心感が生じているという。

- ・田舎では、(都会からの来訪のように)遊んでいるよその子どもでも声をかけ、お菓子をふるまうこともしばしばある。

(2)多様な職種人の居住

- ・圏に住む教師が多い場合、生徒や児童の親には安心感が生まれる。両者のコミュニケーションが地域のいたるところで日常的に図れる。
- ・自治体の職員が地元民であることが多いので、職員は地元民のニーズや心意気をよく理解している。地元民とのコミュニケーションも割合容易である。
- ・職員が(大方が)街内に住んでいるので、あたかも街の人が行政をつかさどり、街の人のために働いているという意識が職員側には根付いている。

4.8 圏の魅力化 地域に観光資源があれば人的資源もあり。観光だけでは移住定住はできないので勢い人的資源を重要視したいものである。これには、特に人格尊重が肝要であり、そこから教育が展開し、地域が整備されていくべきと考える。

5 おわりに

ここでは地域づくりに向けて、生活圏における居住の様相や意識について事例をもとに検討したところ；・街づくり村づくりには、お互いの顔が見えるような圏であれば、居住の充実は図れ、人間性がいかに発揮されるはずである。・圏内外の人間模様を意識の面から活力ある圏がイメージできた。

以上、圏における意識の議論の蓄積をもって今後に向けて資することができた。

なお、体制、過密、経済、合意形成等の問題についてはいずれ扱いたい。